

モダリティ副詞「ナニモ」と否定

井上 優

0. はじめに

1. 否定と呼応する二つの「ナニモ」
2. モダリティ副詞としての「ナニモ」
3. 「ナニモ」と共起する文否定の意味
4. モダリティ副詞「ナニモ」の意味
5. 「ナニモ」の具体例
6. 今後の問題

0. はじめに

ナニ、ドレ、グレ、ドコ、イツ、ナゼなどの不定詞⁽¹⁾は、文法研究の上で重要な位置を占める。生成文法分野でWH-movementが重要な概念であることは、周知の事実であるし、日本語研究においても、助詞「カ」「モ」との統語論的關係、不定詞を含む疑問文(WH-Question)の語用論的機能などがしばしば論じられている。

不定詞そのものの意味、機能についても、尾上1983、奥津1984、1985 a、1985 bが考察を加えている。これらの考察の中心は、不定詞の中心的意義、中心的機能(尾上は「語性」と呼ぶ)の把握と、そこから派生される用法の統一的説明にあり、不定詞を含む構造、例えば、本稿でとりあげる「ナニモ」そのものの意味記述は見られない。

しかし、「ナニモ」ひとつ取りあげても、その用法は様々である。

- (i) どんなことも。なにもかも。一切。すべて。
「足の痛さも一忘れて走った」
- (ii) (下に打ち消しの語を伴う) 何一つ。まったく。「私は一知らないのです」
- (iii) 特にとりたてて。「——そう腹をたてることもないでしょう」
『学研国語大辞典』

(i) 雑多な事物・事態を無選択に指示する。また「～もなにも」の形で同類のものを包含して列挙するのにも用いる。どんなものでも。どのようなことでも。

(ii) 一切の事物、事態を残りなく包含的に指示する。否定表現に用いれば全面否定となる。全部、すべて、全く(～ない)

(iii) (打消を伴って)一つの判断や行為を、格別そうと限定する必要はないと否定する気持ちを表わす。別段(～ない)、特に(～ない)

(iv) (「～もなにも」の形で)事態や程度をより以上に強調する場合に用いる。

『日本国語大辞典』(以上、下線筆者)

下線を施した(iii)の用法が、他の用法と異なる性質を持つことは理解できよう。本稿では、この「ナニモ」の文法における意味あい、及び、この「ナニモ」を含む文の意味について述べる。なお、以下の記述で、*は意味的に不適格な文であることを表す。

1. 否定と呼応する二つの「ナニモ」

まず、本稿でとりあげる「ナニモ」の基本的特徴を明確にするため、否定と呼応する副詞としての二つの「ナニモ」(先に(ii)(iii)とした用法)を比較する。

- (1) a 太郎の部屋には ナニモ 食べるものがない。
b 太郎は 世間のことを ナニモ 知らない。
c 花子は あきれて ナニモ 言えない。
- (2) a ナニモ 太郎はウナギが嫌いなわけではない。
b ナニモ 鶏を割くのに牛刀はいらない。
c ナニモ あいつだけが女ではない。

以下、(1)のナニモ、すなわち(ii)の用法を「ナニモ1」、(2)のナニモ、すなわち(iii)の用法を「ナニモ2」として、二つのナニモの違いを具体的に見ていく。

1.1. 「ナニモ」のアクセント

ナニモ1とナニモ2ではアクセントが異なる。普通、ナニモ1はナニモと平板で発音されるのに対し、ナニモ2はナニモと頭高で発音される。ナニモ2については東京方言でも話者によってゆれがあるらしく、筆者も平板で発音された例を何度か耳にしている。しかし、少なくともナニモ1が頭高で発音されることは⁽¹⁾⁽²⁾ない。

- (3) a 太郎の部屋には ナニモ / *ナニモ 食べるものがない。

b 太郎は 世間のことを ナニモ／*ナニモ 知らない。

c 花子は あきれて ナニモ／*ナニモ 言えない。

(4) a ナニモ 太郎はウナギが嫌いなわけではない。

b ナニモ 鶏を割くのに牛刀はいらない。

c ナニモ あいつだけが女ではない。

ある形式に異なる二つの意味用法がある場合、その違いがアクセントの違いに反映される例はしばしばみられる。例えば、副詞「先に」は、「順序において）先んじて」の意味であればサキニと平板で発音され、「先程、さっき」の意味であればサキニと頭高で発音される。

(5) a どうぞ サキニ 行ってください。

b サキニ 委員会で決定されましたように……。

ナニモ1、ナニモ2が異なるアクセントを持つというのは、単なる偶然ではないのである。

1.2. 「ナニモ」の強調形

ナニモ1とナニモ2は強調形に関する違いがある。「ナニモ」の強調形とみられる「ナンニモ」は、ナニモ1とは対応するがナニモ2とは対応しない。

(6) a 太郎の部屋には ナンニモ 食べるものがない。

b 太郎は 世間のことを ナンニモ 知らない。

c 花子は あきれて ナンニモ 言えない。

(7) a *ナンニモ 太郎はウナギが嫌いなわけではない。

b *ナンニモ 鶏を割くのに牛刀はいらない。

c *ナンニモ あいつだけが女ではない。

ある形式に二つの異なる意味用法がある場合、強調形がその一方のみを担うというのもしばしば見られる現象である。例えば、副助詞「バカリ」は名詞、代名詞に接続すれば「範囲の限定」を表わし、数量詞に接続すれば「概数」を表わす。しかし強調形「バカリ」が後者の用法を担うことはない。

(8) 太郎は一日中 お茶バカリ／バッカリ 飲んでいる。

(9) 太郎は一日にお茶を 二十杯バカリ／*バッカリ 飲む。

ここでも、意味の違いが強調形の上に現れている。

以上、ナニモ1、ナニモ2の違いが、形式の違いと

して現れることを見た。

1.3. 述語否定、文否定と「ナニモ」

ナニモ1とナニモ2では、呼応する否定の性質が異なる。

例えば、「NPダケガNPデハナイ」という形の否定文を考えてみよう。(10)は(11a)(11b)二通りの解釈が可能である。

(10) あいつだけが女ではない。

(11) a (たくさんの人がいる中で)女でないのはあいつだけだ。

b 女なのは あいつだけではない。(他にも女はたくさんいる。)

(11a)、(11b)の意味の違いは、「あいつだけが」否定の作用域に含まれるか否かの違いである。それぞれの意味構造を簡単に図式化すると次のようになろう。(NEG.は否定を表す。)

(12) a [[あいつだけが [[女だ] NEG.]]

b [[あいつだけが 女だ] NEG.]

(12a)、(12b)はそれぞれ、「述語否定」(岩倉1974のいう動詞句否定)、「文否定」の名で呼ばれる否定である。「NPダケガNPデハナイ」という形は、述語否定、文否定いずれの解釈も許すということである。(その理由については省略する。)

このことは、いわゆるウナギ文にもあてはまる。ウナギ文(13)は同定文(10)と同様(14a)、(14b)二通りの解釈が可能である。

(13) 太郎だけがウナギではない。

(14) a ウナギを食べないのは 太郎だけだ。

b ウナギを食べるのは 太郎だけではない。

しかし、このあいまいさはナニモ2を加えることによって解消される。(10)(13)にナニモ2を加えた(15)(16)はいずれも文否定の解釈しかできない。

(15) ナニモ あいつだけが女ではない。(ナニモ女なのはあいつだけではない。)

(16) ナニモ 太郎だけがウナギではない。(ナニモウナギを食べるのは太郎だけではない。)

また、ナニモ2は述語否定の解釈しかできない文、すなわち「NPガナイ」「NPガVP(AP) ナイ」という形の否定文とは共起しない。

(17) a 僕の家だけにファミコンがない。(ファミコンがないのは僕の家だけだ。)

b このチューリップだけが赤くない。(赤くないのはこのチューリップだけだ。)

c 太郎だけがウナギを食べない。(ウナギ

を食べないのは太郎だけだ。)

- (18) a *ナニモ 僕の家だけにファミコンがない。
(*ナニモ ファミコンがないのは僕の家だけだ。)
- b *ナニモ このチューリップだけが赤くない。
(*ナニモ 赤くないのはこのチューリップだけだ。)
- c *ナニモ 太郎だけがウナギを食べない。
(*ナニモ ウナギを食べないのは太郎だけだ。)

以上のことから、ナニモ2は文否定と呼応する、という結論が導かれる。さらに言えば、ナニモ2がある文は文否定文である、ということになる。

一方、ナニモ1は述語否定とのみ呼応する。「あいつだけが女ではない(11)」「太郎だけがウナギではない(13)」における述語否定、文否定の解釈は、それぞれ「VP(AP)ナイノハNPダ」「VP(AP)ノハNPデハナイ」という分裂文の形で表すことができた。否定が分裂文の前提部を構成するというのは、述語否定だけが持つ特徴であるが、ナニモ1が呼応するのは、前提部の否定であり、焦点部の否定ではない。

- (19) a 太郎だけが ナニモ 世間のことを知らない。
b ナニモ世間のことを知らないのは 太郎だけだ。
c *世間のことを知っているのは ナニモ太郎だけではない。

したがって、ナニモ1は述語否定と呼応するとしなければならない。このことはナニモ1が数量詞であることの必然的帰結でもあるが、詳しくは省略する。

ナニモ1とナニモ2の違いは、呼応する否定の違いでもあるわけである。このことをふまえて、以下、ナニモ2について考えることにしよう。(なお、以下では、特にことわらぬ限り、「ナニモ」はナニモ2を指すものとする。)

2. モダリティとしての「ナニモ」

文否定と呼応する「ナニモ」は、発話の中でどのような機能を担うのであろうか。そのことを考える上で重要なのが、発話における、表現性の異なる二つの成分の峻別である。

発話としての文は、「状況の客観的な叙述」を担う成分と「話し手の主観的な心的態度の叙述」を担う成分とから成る。客観的表現、主観的表現の名で呼ばれることがあるように、両者は発話という表現行為におい

て異なる表現価値を持つ。ここでは中右1979に従い、前者を「命題」成分 (proposition)、後者を「モダリティ」成分 (modality) と呼ぶ。

(20) モダリティは、発話時という瞬間的現在における話し手 (および、ときに聞き手) の心的態度である。(中右1979, p.248)

「ナニモ」は、まさにこのモダリティ成分にあたる。そのことを、やはりモダリティ副詞である、「ヨクモ」との比較において見ることにする。

2.1. モダリティ副詞としての「ヨクモ」

副詞「ヨク」には、(i)「十分に」「うまく」「しばしば」の意を表す命題内副詞としての用法(21)と、(ii)ある事態に対する話し手の感慨を表すモダリティ副詞としての用法(22)があるが、副助詞「モ」が付加された「ヨクモ」は、モダリティ副詞としてのみ機能する。

- (21) a このビールは ヨク (十分に) / *ヨクモ 冷えている。
b 日本人は ヨク (しばしば) / *ヨクモ 魚を食べる。
- (22) a この雨の中を ヨク/ヨクモ 来たものだ。
b ヨク/ヨクモ そんなに辛いキムチが食べられるなあ。

以下、モダリティ副詞としての「ヨクモ」の性質を見ていく。

第一に、「ヨクモ」は、事態を既成のものとしてふまえた上で、その事態に対して感じ入った気持ちを表すために用いられる。事態の真实性を疑いつつ、その事態に感じ入ることはありえない。この話し手の心的過程に矛盾する文、例えば質問文と「ヨクモ」は共起できない。

(23) *ヨクモ そんなに辛いキムチが食べられるか?
「ヨクモ」と共起する文は一種の感嘆文としか解釈できないのである。

このことは、説明のムード (寺村1984) を表す「モノダ」の解釈にも反映される。「モノダ」にはいくつかの意味があるが、「ヨクモ」が共起するのは、話し手の驚きを表す場合だけである。その場合、「ヨクモ コンナ (ソナナ, アンナ) ~」「ヨクモ コンナ (ソナナ, アンナ) ニ~」という表現になるのが普通である。

- (24) a ビールは 冷やして飲むものだ。
b *ヨクモ ビールは 冷やして飲むものだ。
- (25) a 子供の頃は 一所懸命勉強したものだ。
b 子供の頃は ヨクモ あんなに一所懸命

命勉強したものだ。

- (26) a 辛いキムチを食べるものだ、
b ヨクモ そんなに辛いキムチを食べるものだ。

(24 a)は、一般的な事柄を述べる文であるが、「ヨクモ」とは共起しない。また、(25 b)が表すのは、過去の事態の回想ではない。過去の事態に対する驚きである。

第二に、「ヨクモ」(及び、モダリティ副詞としての「ヨク」)は、モダリティ副詞(感動詞)「マア」と結びついて(切れめなく発話され)「ヨク(モ)マア」となることがある。その際、「既成の事態に対する感慨を表す」という意味は保持される。命題内副詞としての「ヨク」は「マア」と結びつくこと自体ない。

- (27) a このビールは ヨク(十分に) / *ヨクマア 冷えている。
b 日本人は ヨク(しばしば) / *ヨクマア 魚を食べる。

- (28) a この雨の中を ヨクマア/ヨクモマア 来たものだ。
b ヨクモ/ヨクモマア そんなに辛いキムチが食べられるねえ。

「ヨクモ」がモダリティ成分であるからこそ、同じくモダリティ成分である「マア」と結びつくことができるのである。

第三に、「ヨクモ」が叙述するのは、話し手の心的態度のみであるから、客観的情報を求める質問の答えとしては不適當である。

- (29) この男について何か御存知ですか？
a はい、ヨク知っています。
b *はい、ヨクモ知っています。

(29 a)の「ヨク」は命題内副詞であり、したがって客観的情報になりうる。

以上、「ヨクモ」を例にモダリティ成分の特徴を大まかに見た。

2.2. モダリティ副詞としての「ナニモ」

次に、「ナニモ」がモダリティ副詞「ヨクモ」と同じ性質を持つことを見る。

第一に、「ナニモ」は話し手の特定の心的態度と結びついている。つまり、文の解釈を限定する。

例えば、「コトハナイ」には「～という事態にはならない」「～する必要(理由)はない」という二つの意味がある。

- (30) いくらカレーが好きだからって 毎日カレーばかり食べることはない。

- (31) a いくらカレーが好きだからって 毎日カレーばかり食べるという事態にはなっていない。

- b いくらカレーが好きだからって 毎日カレーばかり食べる理由はないだろう。(ほかのものも食べればいいのだ。)

(31 b)には「毎日カレーばかり食べている」という既成の事態に対する「非難」の意味が含まれているが、(31 a)にそのような意味はない。

しかし、(30)に「ナニモ」を加えた(32)は(31 b)の解釈しかできない。

- (32) いくらカレーが好きだからって ナニモ 毎日カレーばかり食べることはない。(ほかのものも食べればいいのだ。)

「ナニモ」自体が「非難」という話し手の心的態度に密接に結びついているからこそ、(30)のあいまいさが解消されるといえる。

第二に、「ナニモ」は「マア」と結びつくことがある。

- (33) この子も悪気はなかったんでしょから ナニモ/ナニモマア そんなにきつく叱らなくてもいいじゃありませんか。

「ナニモマア」となっても「非難」の意味が保たれていることに注意されたい。

これに関連して、「ナンデマア」「ナントマア」という形が思い出される。

- (34) ナンデ/ナンデマア 太郎はウナギが嫌いなのかねえ？

- (35) ナント/ナントマア 辛いキムチだこと！

「ナンデ(ナンデマア)」「ナント(ナントマア)」はそれぞれ、既成の事態に対する話し手の疑念、驚きを表すモダリティ成分である。ここに「ナニモマア」との平行性を見ることができよう。

第三に、「ナニモ」は、客観的情報を求める質問の答えとしては、不適當である。1.で「ナニモ1」としたものは、そのようなことはない。

- (36) この男について何か御存知ありませんか？

- a いいえ、ナニモ 知りませんわ。

- b *いいえ、ナニモ 知りませんわ。

以上、「ナニモ」がモダリティ副詞であることを見た。

「ナニモ1」が命題成分、特に数量詞であることは、しばしば指摘されることである。つまり、「ナニモ1」が用いられる原理は、モダリティ成分としての「ナニモ」とは全く異なっているのであり、両者に一致

点があるとしても、かなり抽象的なレベルに逆上る必要があるということである。

3. 「ナニモ」が共起する文否定の意味

モダリティ成分である「ナニモ」が「文否定」という特定の否定とのみ呼応することは重要な意味を持つ。「ナニモ」が叙述する心的態度と文否定とは矛盾しない、ということになるからである。中右1981, 1985は文否定をモダリティ否定とし、その本質を「既定的命題に対する異議申し立て^(18.5)」であるとしている。筆者もこの見解に従う。実際、文否定そのものが、話し手の心的態度と深く関わっているとする根拠はある。しかし、今はその点には立入らず、「ワケデハナイ」を例に、文否定が話し手の「異議申し立て」なる心的態度と深く関わっていることを見るにとどめる。

3.1. 「ワケデハナイ」の意味

「ワケデハナイ」は、文否定、特にそのひとつの典型である「部分否定」を表す形として、しばしばひきあいに出される。

(37) [太郎は試験の問題を全部解いた]わけではない。(部分否定)

cf. 太郎は試験の問題を全部解かなかった。(全部否定)

しかし、「ワケデハナイ」の意味は、話し手の心的態度と結びつけることで、より正確に捉えることができる。その点に関する寺村1979の説明を引用する。

ワケデは、ある既知の事実Qについて、(中略)より明白な周知の事実Pを前提として、Pが真なら(あるいはPということが言えるなら)そこからの推論の結果として当然Qは真である(あるいはQという言い方もできる)という表現である……(中略)……これに対し、 $P \rightarrow Q$ という推論そのものを否定するのが \sim ワケデハナイという表現、つまり外側の否定である。(中略)

(37) 井住千代という女は、果してどういう性格の女なのか。そういう疑問に出会うことがあっても、人びとは容易に回答を出そうとしなかった。いや、彼らに意見がないわけではない。その一つは……

「井住千代の性格について尋ねても、人びとはすぐ答えようとしなない(=P)と聞くと(あるいは読むと)、人はふつうは「それはその人たちに格別の意見がないからだろう」(=Q)というふうに見えるだろう。ところがそうではないのだ、とPか

らQを導き出す推論を否定するのである。(寺村1979p.205-6)

「ワケデハナイ」の根底にある話し手の意識の流れは次のようにまとめられよう。

(38) ある既知の命題Pに別の命題Qを関係づける過程全体(以下、この過程を $P \rightarrow Q$ と表す)が誤りである、すなわち $\sim(P \rightarrow Q)$ であると話し手が判断する時、「(Pダカラトイッテ)Qワケデハナイ」という。

要は、PQ間の因果関係を否認する話し手の意識の流れが、「Qワケデハナイ」という形式に含まれているのである。

3.2. 既成の事態の存在

既知の命題P、すなわち既成の事態をふまえて発話されるということが、「ワケデハナイ」と「ナニモ」の共起に決定的な役割を果たしている。そのことは、「ワケガナイ」及びその類義表現「ハズガナイ」が「ナニモ」と共起できないことから理解される。

(39) a *ナニモ 太郎はウナギが嫌いなわけがない。

b *ナニモ 鶏を割くのに牛刀がいるはずがない。

ワケガナイ、ハズガナイは、「Qである可能性を全面的に否定する」、いいかえれば「Qの根拠となるPは全くない」(寺村1984)ということを表す。Pを既成の事態として受け入れた上で、「(Pダカラトイッテ)Qワケデハナイ」と言うのとは、全く事情が異なるのである。

$\sim(P \rightarrow Q)$ という意識の流れは、これまで見てきた「ナニモ」が共起する文に共通する性質である。つまり、何らかの既成の事態Pが存在する。例えば、先にあげた(2b), (2c)((40a), (41a)として再出)には、(40b), (41b)のような意識の流れがある。

(40) a ナニモ 鶏を割くのに牛刀はいらない。

b 鶏を割くのに刀がいる(P)からといって牛刀がいる(Q)ということにはならない。

(41) a ナニモ あいつだけが女ではない。

b あいつが女である(P)からといってあいつだけが女である(Q)ということにはならない。

具体例は5.で見るが、 $\sim(P \rightarrow Q)$ という意識の流れと「ナニモ」とは、密接な関係にあるのである。

3.3. 既成の命題に対する否定的評価

～(P→Q)という意識の流れは、単にP→Qという論理の展開を否定するものではない。その根底には、Pに対する話し手の「否定的評価」が含まれている。

- (42) a 男が化粧する(P)ことは 珍しい(Q)ことではない。
b 男が化粧する(P)ことは ナニモ 珍しい(Q)ことではない。
(43) a 最近の円高(P)も 驚く(Q)にはあたらない。
b 最近の円高(P)も ナニモ驚く(Q)にはあたらない。

(42a)と(42b)、(43a)と(43b)は、ほぼ同じ意味であると言ってよい。「男が化粧する(P)からといって、珍しい(Q)とは言えない」「円高だ(P)からといって驚く(Q)とまではいかない」という意味である。つまり(42a)、(43a)自体、～(P→Q)という意識の流れを含むわけである。

しかし、類似の形式にもかかわらず、「ナニモ」の共起が不自然なことがある。

- (44) 男の化粧は確かに普及した(P)が、だからといって
a 男が化粧する(P)ことは 一般的で(Q)はない。
b 男が化粧することは ナニモ 一般的ではない。
(45) 男の化粧は確かに普及した(P)が、だからといって
a 男が化粧する(P)ことは 普通で(Q)はない。
b ??男が化粧することは ナニモ 普通ではない。
(46) 男の化粧は確かに普及した(P)が、だからといって
a 男が化粧する(P)ことは 尋常で(Q)はない。
b *男が化粧することは ナニモ 尋常ではない。

(44b)自体は少し不自然かもしれぬが、上のように特定の文脈を与えれば自然な文である。しかし、(45b)、(46b)は文脈を補っても不自然(不適格)である。そもそも、「*男が化粧した(P)からといって、それは尋常だ(Q)とは言えない」ということ自体、不適格である。つまり、(44a)、(45a)、(46a)は、～(P→Q)という意識の流れを含まないのである。

(42b)、(43b)、(45b)、(46b)の適格性を決める、すなわち～(P→Q)という意識の流れを含むかど

うかを決めるのは、既成の事態Pを「珍しくない」「驚くにはあたらない」とするか、「普通ではない」「尋常ではない」とするかという評価のあり方にほかならない。考えてみれば、「普通ではない」「尋常ではない」は「特殊である」「異常である」という意味に解釈するのが普通で、「普通というほどではない」「尋常というほどではない」という解釈はしにくい。(これには「普通だ」「尋常だ」の意味が関与しているが、ここでは省略する。)これらは、形式上は否定形であるが、意味上はほぼ反意語の肯定形に相当すると言ってよい。つまり、否定文とはいえ「～である」という意味のことを述べているのである。その意味で、命題内容に対する「肯定的評価」といえよう。(事態の「よしあし」は問題にしていなことに注意されたい。)この種の例としては、「可能ではない(=不可能だ)」「容易ではない(=困難だ)」などがあげられる。

それに対し、「珍しくない」「驚くまでもない」は、反意語の肯定形に相当する意味を持たない。これらが意味するのは、「珍しい(驚く)というレベルには達していない」という、既成の命題に対する「否定的評価」でしかない。つまり、「～ではない」ということしか述べていない。～(P→Q)という意識の流れの根底にあるのは、「既成の命題Pは命題Qと結びつくほどのものではない」という話し手の否定的判断である。「ナニモ」が共起するのは、まさにこの種の否定的判断であり、肯定的評価を意味する(45b)、(46b)は、「ナニモ」とは共起できないのである。

3.4. 「ナニモ」が共起する語用論的要因

否定的評価と関連して、～(P→Q)という意識の流れには語用論的な要素が含まれることがある。

- (47) チョムスキー理論(P)は ナニモ 理解不可能な理論(Q)ではない。

P、Qは出来事名詞でない(つまり、命題相当でない)が、(47)が「ナニモ」と共起するのは、次に示すような意味構造を持つからである。

- (48) チョムスキーの文法である(P)からといって(チョムスキーの文が難解だ(P)からといって)、理解不可能な(Q)わけではない

しかし、構造が同じでも「ナニモ」が共起できないことがある。

- (49) チョムスキーは ナニモ 神様ではない。
(50) *チョムスキーは ナニモ ただものではない。

(49)は「チョムスキーだからといって(チョムスキーがいくら偉大な言語学者だからといって)神様である

とはいえない」という意味である。しかし、50では、「*チョムスキーであるからといって、ただものであるということにはならない」ということ自体が不適格である。「ただものではない」は、「非凡な才能を持つ」という肯定的意味に解釈されるのが普通であり、50は3.3.で述べた事情で不適格となる。

(47)50では、「チョムスキーの文法である」「チョムスキーである」という命題を「チョムスキーの文法は難解だ」「チョムスキーは偉大な言語学者である」と読み込む過程がある。この読み込み自体は語用論的なものであるが、この語用論的な読み込みが「ナニモ」との共起に決定的な役割を果たしている。～(P→Q)という意識の流れは、命題Pの内容に対する否定的評価を含むのであるから、否定の対象となる「チョムスキーの文法であること」「チョムスキーであること」の意味あいを読み込まれる必要があるのである。

以上、「ナニモ」が共起する文否定文の根底にある、話し手の意識の流れ、すなわち心的態度について見てきた。まとめると次のようになる。

- (51) 「ナニモ」が共起する文否定は、既成の命題Pに別の命題Qを関係づける過程全体の否定であり、その根底には、「PはQと結びつくほどのものではない」という命題Pに対する否定的評価が含まれている。

4. モダリティ副詞「ナニモ」の意味

文否定の意味とモダリティ副詞「ナニモ」の意味は密接に結びついている。ここでは、国語辞典で「ナニモ」の意味記述のためにしばしば用いられる、「特ニ(トリタテテ)」「別ニ(別段)」との比較において、「ナニモ」の意味を考える。

4.1. 「ナニモ」「別ニ」と「特ニ」

「ナニモ」「別ニ」「特ニ」は確かに類似の文脈で用いられる。

- (52) ソウルでは、バスの中で立っていると、座っている人にカバンを引っぱられることがあります(P)。しかし、
- a ナニモ あわてる(Q)ことはありません。
 - b 別に あわてる(Q)ことはありません。
 - c 特に あわてる(Q)ことはありません。
- それは、カバンを持ってやろう、という意味なのです。

この例では、「別ニ」「特ニ」に比べ「ナニモ」の方がより強い否定である、という印象を受けるくらいで

ある。しかし、次のような例ではどうだろうか。

- (53) ソウルでは、バスの中で立っていると、座っている人にカバンを引っぱられることがあります(P)。しかし、

- a ナニモ カバンをとろうとしている(Q)わけではありません。
- b 別に カバンをとろうとしている(Q)わけではありません。
- c ?? 特に カバンをとろうとしている(Q)わけではありません。

それは、カバンを持ってやろう、という意味なのです。

この場合、「特ニ」は不自然である。「ナニモ」「別ニ」と「特ニ」は根本的に異なる意味を持つのである。

「特ニQワケデワナイ」が意味するのは、PQ間に過度の因果関係を認めることに対する異議申し立てである。「P→Q 1までは言えぬが、P→Q 2くらいならありうる」というように、Q 1と同種の内容であるが、より穏当な内容であるQ 2の存在を主張するという含みがある。(53c)は、「カバンを引っぱる(P)からといって、カバンをとる(Q 1)ことはしない(が、カバンの中をのぞく(Q 2)くらいならありうる)」といった意味に解釈される。このような意味が文脈にそぐわないため、不自然なのである。「特ニ」は因果関係の強さに関する、中立的な立場からのコメントにすぎない。

それに対し、「別ニ」「ナニモ」はPQ間に因果関係を認めること自体に異議を申し立てる話し手の心的態度を表す。(「別ニ」が独立で感動詞的に用いられることがあるのは、その反映である。)否定の対象となるのは、PQ間の因果関係の強さではなく、P→Qそのものなのである。～(P→Q)という論理の展開は、むしろP→Qに対する「異議」という意識の中に内包されるものとして捉えられよう。

4.2. 「ナニモ」と「別ニ」

一方、「ナニモ」と「別ニ」の違いは、「異議の強さ」の違いとして捉えられる。結論だけを言えば、「別ニ」が意味するのは消極的異議であり「ナニモ」が意味するのは積極的異議である。別の言い方をすれば、「ナニモ」という時は、異議の対象としてのP→Qの存在を重要視して、それに反発、対処する気持ちがあるのに対し、「別ニ」と言う時は、P→Qを軽視、無視しているのである。「ナニモ」が「ヨリニヨッテ」と共起できるのに対し、「別ニ」が共起できないことはその反映である。

- (54) いくら洗濯物がたまっている(P)からといって、
 a ナニモ ヨリニヨッテ こんな天気
 の悪い日に洗濯する(Q)ことはない。
 b *別ニ ヨリニヨッテ こんな天気
 の悪い日に洗濯する(Q)ことはない。

「ヨリニヨッテ」は、「こういう状況だけにはなっ
 てはしなかった(しかし、このような状況になっ
 ちゃった)」という、状況に対する話し手の強い反発、非
 難を表す。「ヨリニヨッテ」という時、話し手は状況を
 軽視してはいないのである。それに対し、「別ニ」は
 「そんなこと、別にどうでもいいよ」という表現にも見
 られるように、状況を軽視している、という意味を含
 む。「別ニ」が「ヨリニヨッテ」と共起しない理由はこ
 こにある。

- (55) (忙しい(P)から)手伝いましょうか?
 a 別に 手伝っていただく(Q)なくても結
 構です。
 b ナニモ 手伝っていただく(Q)なくても
 結構です。

(55a)は言い方によっては、申し出に対する「無視」
 を表す。また、(55b)は申し出に対する「拒否」を表す
 ことがある。自分にとって都合の悪い申し出は、軽視
 するわけにはいかぬのである。

5. 「ナニモ」の具体例

最後に、「ナニモ」を含む典型的な例をいくつか見る
 ことにする。もとより、包括的な記述を目指すものでは
 ない。簡単なコメントを加えるにとどめる。

5.1. 必要性の否定

「ナニモ」と共起する文のひとつの典型が、「必要性
 の否定」を表す文である。

- (56) ナニモ 君があやまる(Q)必要はない。
 (57) この程度の熱であれば ナニモ 心配する(Q)
 ことはない。
 (58) こんな簡単な仕事は ナニモ 手伝ってら
 う(Q)までもない。
 (59) ナニモ 礼を言われる(Q)には及ばない。
 (60) ナニモ 無理して食べ(Q)なくてもよい。

これらの文はすべて「既成の状況Pは別の状況Qを
 要求するほどのものではない」ということを意味する。
 次の文も同様に考えてよい。

- (61) ナニモ 人に金を恵んでもらうほど おちぶ
 れてはいない。(確かにおちぶれてはいる(P)が
 人に恵んでもらう(Q)ほどのことはない。)

「ナニモ(別ニ)～ナクテモ」は、これだけで「非難」
 の意を含む必要性の否定を表すことができる。

- (62) ナニモ よりによって こんな日に洗濯しな
 くても……。

5.2. 限定表現を伴う文否定

「NPダケガNPデハナイ」に代表される、限定表現を
 伴った文否定文も多い。

- (63) ウナギ文が見られるのは ナニモ 日本語だ
 けに限ったことではない。

- (64) 後置詞で格関係を表わすのは ナニモ 日本
 語特有の性質ではない。

ここには、「P→Qダカラトイッテ、～P→～Qトイ
 ウコトニハナラナイ」という意識の流れがある。(63)な
 ら、「『日本語ならばウナギ文がみられる』からといっ
 て『日本語でなければウナギ文はみられない』という
 ことにはならない」という具合である。次の例も同様
 に考えてよいだろう。

- (65) 太郎が遅刻するのは ナニモ 今に始まった
 ことではない(今が始めてではない)。(太郎が
 遅刻するのは 今だけのことではない。)

P→Qから類推される推論～P→～Qを否定する
 という点が、この種の文否定文の特徴である。

5.3. 「ナニモ」と共起する命令文、疑問文

「ナニモ」は命令文、疑問文の中で用いられることが
 ある。

- (66) いくらカレーが好きだからって ナニモ 毎
 日カレーばかり食べるなよ。
 (67) 時間はあるのだから ナニモ そんなにあわ
 てるなよ。
 (68) 暑いからって ナニモ ビールばかり飲むこ
 とはないんじゃないか?
 (69) ナニモ 塾に通わなくても勉強できるのでは
 ないか?
 (70) ナニモ 腹がへっている時に おいしいレス
 トランの話をしなくてもいいではないか。

これらは、「～ナヨ」「～ジャンイカ?」という形か
 らもわかるように、命令文、疑問文とはいえ、意味的
 にはむしろある状況に対する「非難」である。

否定命令すなわち禁止の意味構造は「相手にある行
 為をしnaiことを命ずる」(中右1979p.234)というも
 のである。しかし、これらの文は、「相手がある行為をし
 ている(しようとしている)」ことに対して「非難」し
 ているのであって、その点、単なる「禁止」とは異なる

る。また、「～デハナイカ」は「提案」を意味するが、「ナニモ」がある場合には、「非難を含む提案」を意味する。「非難」の根底にあるのが、事態に対する話し手の「異議」「反発」であることは、いうまでもない。

6. 今後の問題

本稿では「ナニモ」のモダリティ成分としての用法を論じた。検討しなければならない点は数多く残っているが、最後に不定詞を含む構造について考える際に問題となるであろうことを述べておきたい。

「ナニモ」に限らず、「不定詞+副助詞」という形の多くが、モダリティ成分としての用法を持つ。「ダレモ」のモダリティ成分としての用法の例をあげておこう。

(71) ダレモ 好きこのんでこんな仕事をやっているわけではない。

(71)の「ダレモ」には四つの特徴がある。(i)「ダレモ」は頭高で発音され、「人の非存在」を表す「ダレモ」と対立する。(ii)文否定を表す「ワケデハナイ」と共起している。(iii)(71)は全体として、「私は決して好きこのんでこんな仕事をやっているわけではない」という「話し手の」強い否定的態度を表している。(iv)この「ダレモ」はモダリティ副詞「ナニモ」といいかえることができる。

(72) ナニモ 好きこのんでこんな仕事をやっているわけではない。

したがって、この「ダレモ」は、「話し手の強い否定的態度」を表すモダリティ成分といえる。

(71)の意味は、「好きこのんでこんな仕事をやっている人は、ダレモいない」という意味から語用論的に派生されたものと考えられるかもしれない。しかし、副詞としての「ダレモ」と「ナニモ」は、表現性が全く異なるのである。「ダレモ」という形式のレベルでの、「命題成分—モダリティ成分」という対立を検討することが先決であろう。

「ナニモ」「ダレモ」に限らず、ある言語形式のモダリティ成分としての機能を保証するものは何か、という問題は、今後検討されねばならぬ重要な問題のひとつである。

<注1> 一般に「疑問詞」と呼ばれる語類を「不定詞」と呼ぶことについては抵抗があるかもしれない。しかし、英語学における“WH-word”のように、形式的な特徴にもとづいた命名ができない以上、最も本質的な機能にもとづいて命名するよりほかない。詳しくは、奥津1984, 1985 a, 1985 bを参照されたい。

<注2> McGloin, N.H. 1972, Some Aspects of Negation in Japanese, Ph.D.dissertation, University of Michigan には、Negative Polarity Itemとしての「ナニモ」「ダレモ」「ドコエモ」について、“Nani, dare, doko-e, in the environment of mo-negative, are non-accented. They are pronounced nani-mo, dare-mo, dokoe-mo.” (p. 6) とある。単に「ナニ」のアクセントが保たれたのがナニモ2なのか、それともナニモ2のアクセントには別の意味があるのか、問題となるところである。

<注3> 品詞の違いがアクセントの違いとして現れることがある。例えば、擬態語「ベタベタ」はそれ自体副詞として機能することがあるが、その場合はベタベタ(スル)と頭高で発音される。しかし、「ダ」を伴って形容動詞となる場合はベタベタダと平板で発音される。擬態語にはこの種の語が多い。「サキニ」「ベタベタ」ともに頭高型、平板型の対立として現れているのが興味深い。

<注4> この他に、「ナニモ1」は文否定を表す典型的な形「ワケデハナイ」に呼応しないという事実がある。

(73) a 太郎は 世間のことを ナニモ 知らない。

b 太郎は 世間のことを ナニモ 知らないわけではない。

c *太郎は 世間のことを ナニモ 知っているわけではない。

<注5> 中右1981では「異議申し立て」の意味論的前提として次の点をあげている。

ある事柄に異議申し立てをする過程は、一般に、その事柄がその時点で先立ってなんらかの形で(たとえば、だれかほかの人によって主張されたりなどして)話題として確定していることを要求するのである。(p. 2)

<注6> 感動詞「ナニ(ナアニ)」がこれと類似の意味を持つことは重要である。

それほど大したことではないという意味で相手の言葉や前に述べた自分の気持ちを否定するときに用いる語。「なに、かまうものか」「なに、ちょっと失敬しただけのことだ」「少し妙のようだが、なに、妙でも何でもなし」二葉亭四迷、浮雲

(『学研国語大辞典』から引用)

実際、「ナアニ、男が化粧することは珍しいことではないさ」は自然な文であるが、「??ナアニ、男が化粧することは尋常なことではないさ」は不自然である。

参考文献

- 岩倉国浩1974 『日英語の否定の研究』研究社出版
- 奥津敏一郎1984 「不定詞の意味と文法——『ドッチ』について——」『都大論究』21号(1)―(16) 東京都立大学国語国文学会
- 1985 a 「続・不定詞の意味と文法」『人文学報』173号(1)―(2)東京都立大学人文学部
- 1985 b 「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』23号(1)―(12)
- 太田朗1986 「G B理論について」上智大学言語学会第1回大会講演
- 尾上圭介1983 「不定語の語性と用法」渡辺実(編)『副用語の研究』404-431 明治書院
- 寺村秀夫1979 「ムードと否定」『英語と日本語と』191-222 くろしお出版
- 1984 「日本語のシンタクスと意味II」くろしお出版
- 中右実1979 「モダリティと命題」『英語と日本語と』223-250
- 1980 「文副詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座第2巻文法』157-220 大修館書店
- 1981 「変形と意味の原理」『英語青年』127巻7号2-6 研究社出版
- 1984 「意味論の原理(5)——S—モダリティの意味と形——」『英語青年』130巻5号24-26
- 1985 「意味論の原理(18)——二重否定の発想と論理——」『英語青年』131巻6号 32-34
- 仁田義雄1979 「日本語文の表現類型」『英語と日本語と』287-306

(東京都立大学大学院学生)

後置文に関するオブザベーション

——単文の場合——

大島 資生

1. はじめに

- (1) a やって来たよ、太郎が。
b 火傷しちゃったんです、煙草で。
c かわいいね、コアラは。

私たちは、日常の会話の中で、(1)のような、いわゆる「倒置」のおこった文を非常によく用いる。だが、文中にあるどんな要素でも自由に文尾におくことができるかという、そうではない。小論では、単文中のいくつかの要素について、それを文尾におくことの可否について、また、文尾におくことができない場合にはどのような制約が働いているのか考察してみたい。

なお、以下では(1)のようなパターンを久野(1978)の用語にならって「後置文」と呼ぶことにする。

2. はめ込み

考察にはいる前に、「はめ込み」という概念を導入しておきたい。まず、次のような文をみよ。

- (1) 太郎は行ってしまったよ、東京へ。

この文の話し手には、「東京へ」という後置要素を「行ってしまったよ」にかからせるような意識がある。つまり、あたかも、「行ってしまったよ」の前に「東京へ」を「はめ込む」ような意識がある。また、聞き手も、「東京へ」を「行ってしまったよ」の前に「はめ込んで」解釈していると考えられる。これは、前に発話した語句に後から発話した語句がかかっていくという素朴な意識、すなわち、松下(1928)の言う「逆流」に相当するものである。以下では、上述のような意識を「はめ込み」と呼び、「はめ込」まれるべき後置部分中の位置を Pro で示すことにする。たとえば、(1)は次のようになる。

- (2) 太郎は Pro 行ってしまったよ、東京へ。

3. 各種の要素の後置

3.1. PP と主題

ここでは、「ガ」「ヲ」などの後置詞(Postpositional)にマークされた句(Postpositional Phrase 以下PPと